“無罪ではれて暮らすようになったが、大韓民国の謝罪を受けたくて”

【2018.12.1 ハンギョレ新聞「[土曜版]ルポ：在日同胞良心囚の謝恩行事」

再審無罪を受けた在日同胞良心囚
支援した弁護士・本の著者などを招聘
東京・大阪出版記念会などを開き
“スパイの烙印から離れて暮らさせることに感謝”

独裁政権の時、スパイにねつ造された被害者
130 人余り中、現在まで 40 人だけが再審
“在日同胞特別法を作らなければならないが、
まず大統領の暖かい言葉を聞きたくて”

※朴正熙、全斗換独裁政権時にスパイにねつ造された在日同胞被害者中、現在までに 33 人が再審を通じて無罪を受けている。これを中間決算するものとして在日同胞良心囚は、この 11 月 22 日と 24 日に日本の東京と大阪で『祖国が棄てた人びと(著者：金孝淳)』日本語版出版記念会などの記念行事を開催した。大阪での行事が終わった後、李哲さん、金元重さんなど在日同胞良心囚と李錫兌、沈載桓弁護士などが記念写真を撮っている。

この 11 月 22 日から 24 日まで、日本の東京と大阪において‘在日韓国良心囚同友会’李哲代表など在日同胞良心囚と、これらを支援した再審弁護士など、韓国に渡った関係者が一堂に会する多様な行事が開かれた。『祖国が棄てた人びと』日本語版出版記念会と講演会、晩餐会などの集いが、時には盛大に、時には質素に進行された。この特別な行事を同行取材した。

“いつ死刑執行されるかも知らない人が、かえって私を心配してくれて…”

柳英数(69・以下敬称略)さんは、長い間、言葉にならず声をつまらせた。代わりに大きな涙が流れ落ちた。向い側の席に座っていた金元重(67)の目にも、いつのまにか涙が一杯だった。司会を担当した李哲(70)を始めとして、康宗憲(67)、徐聖寿(67)、李宗樹(60)も、頭を上げて目をまばたきしたり、目じりを手でぬぐった。みんな祖国でのスパイねつ造により、長い獄中生活を強いられた在日同胞良心囚だった。

“西大門拘置所で康宗憲と一緒だった私（李哲）は、康宗憲と上下階で過ごした。私がひどく咳き込んでいたとき、康宗憲は‘単純な咳ではない。早く診療を受けて’と言った。彼自身がいつ死刑場に引きずられて行くかも知れない時にである。”

朴正熙維新独裁の真っ最中だった 1977 年 4 月に、釜山大学大学院に留学中だった柳英数は、民主主義と統一がますます遠ざかるのを残念に感じていた。純粋な情熱で胸一杯だった彼は、親しい友達の叔父であった陸軍砲兵学校校長(パク・スンオク)を訪ねて、“北朝鮮軍の高位将軍らと協議して、統一のために努力してほしい”という内容の手紙を渡した。彼は、その場で国軍保安司令部(保安司)に連行されて行き、スパイにねつ造された。保安司西氷庫で受けたひどい拷問のせいで、彼は腹に水がたまって呼吸困難まで経験していた。腹の中が腐っている状況だったが、拷問にひざまずいたという自責感に、柳英数は‘いっそこのまま死んだ方がましである’と考え、自暴自棄になっていた。その時、1975 年在日同胞留学生スパイ団事件で死刑囚であった李哲と康宗憲は、‘どうか診療を受けろ’と柳英数を諭した。

※『祖国が棄てた人びと』日本語版出版記念会を推進した李哲(右側)、金元重(左側)さんが、著者である金孝淳・前ハンギョレ新聞編集者と 11 月 23 日東京のあるホテルロビーでポーズを取った。

マフラーはソウル貞陵 1 洞の‘聖歌カンザシ会’修道女が連帯の気持ちを込めて、在日同胞良心囚にあげようと手で編んだものだ。
※ソウル貞陵 1 洞の‘聖歌カンザシ会’修道女が在日同胞良心囚に与えるために編物で直接編んだマフラー(50 個)と、慰労と連帯の気持ちを伝える手紙。

『祖国が棄てた人びと』の熱い熱気

11 月 23 日夕方、大阪市郊外にある石切温泉ホテルに集まった在日同胞良心囚は、柳英数の回顧に声もなくむせび泣いた。この日の集いは無罪判決を受けた良心囚が、自分たちに関する本である『祖国が棄てた人びと』の日本語版出版記念会(22 日東京、24 日大阪)を開くことを契機に用意された。‘祖国が棄てた’自分たちを抱きしめてくれたことへの、小さいながらも特別な思いのこもった謝恩の行事であった。再審弁護を引き受けた李錫兌、沈載桓、張慶旭、李相姫、曺永鮮、宋尚教、辛胤京、崔龍根などの弁護士らと、真実和解委員会の調査時から一緒にしてきた金栄珍と、民族問題研究所の金英丸などの市民団体関係者、『祖国が棄てた人びと』を執筆した金孝淳と、出版社関係者・康映仙(西海文庫)、関正則(明石書店)等が招請された。

今回の行事を推進した李哲は、“初めは私も再審する心がなかったが、皆さんの説得で再審に踏み切った。そして、こういううれしい席にまでつながった。その間、力をつくしてくれた方々に感謝の気持ちを少しでも伝えたかった。遠い道のりを来てくれてありがとう”と挨拶した。

柳英数も沈んだ雰囲気を挽回しようと、教導所の運動時間にライターの石(タバコの火を付けるのに必要な小さい火打石)を探してまわった、李哲とのエピソードで一同を笑わせた後、“いつ死刑場に引きずられて行くかも知れない状況であったのに、そんなふうに楽観的だった。そういう人びとが生き残って、皆さんの支援で無罪を受けた。おかげで今後、堂々と生きることになった。本当に感謝する”と話した。

しかし、祖国によって封じ込まれてしまっていたこれらの人びとが経験した痛みの跡は、まだあちこちでにじみ出ている。全斗煥政権の時である 1983 年に、保安司によってスパイにねつ造された徐聖寿は、“その間、わざわざ全てのものを忘却しようと努力してきたが、ただ一つだけは忘れないように努めた。ソウル拘置所の囚人番号 126 番だ。いつも思い出そうと‘西大門 126’を、私の E メール ID で使っている”と話した。

医者になろうとソウル大学医学部に通っていて、スパイにねつ造された康宗憲は、“祖国は国家保安法にかけて私たちを棄てたが、私は自らを国の宝物、すなわち国宝だと考えて死刑囚時期を持ちこたえた”と話した。

韓国でのこれらの在日同胞良心囚の痛みは、暖かく抱き合わせて包んでくれてきた。金孝淳は“3 年前、本を出す時は、このように意味深い日がくると考えることができなかった”として、“皆さんの犠牲を肥やしにして韓国の民主化が進行していた。今後、韓国と中国、日本など東アジアの平和と発展のためにも共に努力しよう”と話した。

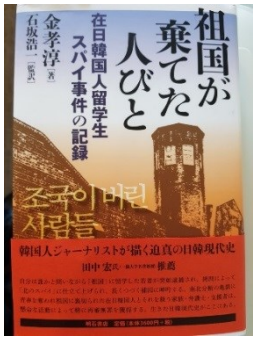
草創期から再審弁護団に参加した沈載桓は、“在日同胞が独裁政権時から受けた残酷なことは、私たちの社会が構造的にどのように問題だったのかを見せてくれるが、皆さんの闘争と苦労がキャンドル革命の基礎になっている”と答えた。

保安司拷問捜査官(高炳天)の実刑を引き出した張慶旭は、“再審弁護を引き受けて在日同胞良心囚が経験した痛みと苦痛を、少なくとも分かることができた。再審無罪が終わりではなく、国家賠償と加害者処罰など被害者の完全な権利の糾明にまで進まなければならない”と明らかにした。

11 月 22 日に東京の立教大学で開かれた『祖国が棄てた人びと』出版記念会兼講演会には 150 人余りの聴衆が会場をいっぱいに満たした。日本語版翻訳者である石坂浩一(立教大学教授)が代表である立教大学・平和コミュニティ研究機構が主催したこの日の行事は、韓国民主化と在日同胞良心囚に関

する金孝淳の講演、再審現況に対する李玲京(立教大学兼任講師)の講演など 3 時間近く続いたが、席をはずす人はいなかった。日本社会を揺るがした‘11・22 事件’発生 43 周年の重みが感じられた。

※11 月 22 日、東京の立教大学で『祖国が棄てた人びと』日本語版出版記念会が終わった後、参席者が記念撮影をしている。日本の知性・田中宏の姿も見える。



※在日同胞良心囚に関する『祖国が棄てた人びと』(著者・金孝淳)の日本語版表紙。

李錫兌弁護士の根気力

1975 年 11 月 22 日、朴正熙政権の秘密情報機関である中央情報部(現国家情報院の前身)は、‘学園浸透北朝鮮スパイ集団’を検挙したとして、スパイ 14 人の名簿と写真を発表(1 次検挙)した。この中の 12 人が日本で生まれて育った在日同胞留学生(大阪に居住すると言っていたキム・サムナンは仮想人物であったこと)だった。その年の 12 月には、国軍保安司が再び在日同胞留学生 6 人をスパイとし拘束(2 次検挙)した。11・22 事件だけで在日同胞留学生 17 人がスパイにねつ造されて、そのうちの 4 人は死刑、11 人は無期～5 年刑を宣告された。2 人は 4 年が過ぎた 1979 年に大法院で無罪判決が下された。

11・22 事件は日本社会に深い衝撃と傷を残したが、日本の市民運動と韓国の良心勢力との連帯を促進する契機ともなった。日本の市民が中心となった在日同胞良心囚釈放のための救援会の活発な活動がそれだ。22 日東京と 24 日大阪での出版記念会にも、救援会メンバーと日本の知識人がたくさん参加した。

22 日東京の行事には、日本の代表的知性・田中宏(81・一橋大学名誉教授)も参加にした。集いに最後まで参加した彼は、“韓国は、その間、たくさん変わって発展したが、日本はあまり変わらなかった”として、“日本社会が韓国に学ばなければならない”と話した。大阪行事に参加した李哲救援会の住谷章(69)は、“1988 年に李哲釈放以後にも集いが何度もあったが、今回の出版記念会には韓国と日本の市民が一緒にできたことが、何よりもうれしい”と話した。

在日同胞良心囚の総数は、正確な統計がない。国防部の過去史真相究明委員会「報告書(2007.12)」は、日本関連スパイ事件が全 319 件(二重保安司・国軍機務司令部が 73 件を扱い)と明らかにし、真実和解委員会は‘在日韓国人良心囚を救援する家族・僑胞の会 (海外在住韓国人) ’の資料に基づき、日本出身の在日同胞スパイ事件被害者は 130 人余りだと推定した。

独裁政権は、青年学生たちの民主化運動を押さえ込む手段で、最も弱い輪である在日同胞留学生をいつもスパイにねつ造した。金孝淳は東京と大阪での講演で、“在日同胞留学生は独裁権力がいつでもスパイにねつ造することができる金魚鉢の中の金魚であった”と話した。

これらの中で、現在まで再審を通じて無罪が確定した人は 33 人だ。この他に再審が進行中である人が 4 人、裁判開始を待つ人が 3 人だ(李玲京：集計)。これらを全部合わせても全体被害者の 30%に過ぎない。少なくない成果ではあるが、まだ進まなければならない道は遠い。

李宗樹が 2010 年 7 月再審を通じて初めての無罪を受けたが、続いて再審に立ち向かう在日同胞被害者は少なかった。拷問の悪夢を再び引き出すことが苦痛なうえに、自分たちをそういう状況にした韓国の司法体系と政治権力を信頼できなかったためだった。

これらを説得して雰囲気を変えたのは、長期間にわたって人権弁論を続けてきた李錫兌(65)であった。 彼は人権に関心が高い沈載桓、李相姫、張慶旭、曺永鮮などと共に、在日同胞スパイねつ造事件再審弁護団を設けて、2011 年 3 月 11 日に大阪に飛んだ。よりによって東日本大地震が発生した日だったの

で家族が出国を止めたが、5 人の弁護人は予定通りに 3 泊 4 日の間、大阪でスパイねつ造被害者 20 人に会った。真実和解委員会元調査官・金栄珍と当時カトリック人権委員会事務局長・金ドクチンも同行した。

“李哲、柳英数、金元重先生などは、2011 年 3 月に会った時、再審をしないといった。韓国状況が過去に比べてどれくらい変わったのか疑いがあっただけでなく、再審を通した個別的な被害救済に反対した。在日同胞スパイねつ造は国家が犯した犯罪行為なので、‘光州抗争’や‘済州 4・3’のように「特別法」を作って、一括的に解決しなければならないということだった”と、張慶旭は大阪弁護士会館であった良心囚との出会いを、このように回想した。

※在日同胞良心囚である柳英数さんと康宗憲さんが 11 月 23 日、大阪市郊外の石切にあるホテルで開かれた晩餐会でポーズを取っている。1970 年代死刑囚でソウル西大門拘置所で服役中の康さんは、1977 年にスパイにねつ造されて入ってきた柳さんに、拷問で壊れた身体が早く癒えるようにと励ました。

The Dong-A Ilbo　1975年11月22日　土曜日

學園浸透間諜團을摘發

中央情報部발표 一黨21名檢擧送致

國內連絡責任3名은北韓도往來

日서留學假裝潛入

「自由化」구실로混亂을劃策

東亞日報

※1975 年 11 月 22 日中央情報部がねつ造し、発表した在日同胞留学生スパイ事件に対する当時の新聞報道。

再審への恐れが、未だに多く残されている

李錫兌などは、当時これに対して“法を作って国家犯罪被害者を名誉回復させるのが理想的でも、韓国の政治状況上では、まだまだ可能性が低い。法制定運動をして失敗すれば在日同胞の挫折感がもっと大きくなりえる。まずは次善策でも始めよう”と説得した。

柳英数と李哲などは再審に同意したが、金元重(千葉商科大教授)は、ずっと後に決心した。彼は“忙しくて時間を捻出するのが難しかったことと、再審は問題解決の正解ではないと見ていた。そこで金栄珍、チョン調査官が二度にわたって日本にきて、‘再審はただ単になされたのではなく、韓国民主化運動の成果だ。再審無罪を受けること自体が、民主化運動に参加することだ’と説いた。その論理に説得された(笑い)”と話した。

しかし、在日同胞良心囚は 33 人全員がスパイ容疑再審無罪(一部項目有罪含む)という中間成績に、決して満足していない。まだ再審を恐れたり、気に入らないと考える人びとが少なくないうえに、連絡が最初からつかない被害者もいる。したがって、これらには‘国家の謝罪’と「特別法」制定を通した一括解決を願っている。

“再審無罪が相次いでいるけれども、韓国では正しく報道されなくて、まだ私たちをスパイだと考える人びとも多い。このような社会認識を変えるためにも、最小限、大韓民国という国家の謝罪がなければならない。国家を代表するのが大統領だ。大統領が、私たちを青瓦台に呼ぶとか、それとも日本を訪問する時に少しの間でも会って‘過去に政府が皆さんに誤りを犯した’という一言でもしてくれたら良いだろう。キャンドルの灯で誕生した文在寅大統領がしなければ、誰ができるのか。そのような日を待ち望んでいる”。

死刑囚として 13 年の教導所生活を終えて(1988 年)日本に戻った後、在日韓国人良心囚同友会を構成して、今まで韓国民主化および在日同胞の地位向上運動をしてきた李哲は、11 月 23 日の東京で持たれた「ハンギョレ」との別途インタビューで、このように話した。

彼の小さい希望が、実現する日を共に待つと、喜んで約束した。

【文・写真：金琮哲記者】